

国際学院新聞

第68号

(編集発行)

学校法人 国際学院

〒330-8548

さいたま市大宮区吉敷町2-5

TEL 048 (641) 7468

FAX 048 (641) 7432

インターネットホームページアドレス

https://ch.kgef.ac.jp/

主なニュース

- 公開講座、学生図書委員会、財務情報の公開 …… 2面
- 幼児絵画展、味彩コンテスト、実習報告 …… 3面
- 高校 国内・海外研修、陸上競技部 …… 4面
- 語学研修、海外研修、通信制校外学習 …… 5面
- 体育大会・体育祭、五峯祭、短大海外研修 …… 6面
- おもちゃ・ストラップ、学生会活動、生徒会活動 …… 7面
- 卒業生の近況報告、ベストブック、教育振興資金 …… 8面

KGブランドの確立へ

第VI期中期計画が始動

未来をつむぐ選ばれる教育機関へ

教育を取り巻く環境は、かつてない転換期を迎えている。コロナ禍を契機とした社会構造の変化、急速に進む少子化、そして令和7年4月から施行された改正私立学校法。これらの環境変化は、学校運営に、今までにない変革と対応力を求めている。

こうした状況のなか、学校法人国際学院はこの10月、第VI期中期計画（令和7年～令和12年）を始動させた。計画では、「財務の安定」「教育の質向上」「定員の充足」「地域連携」の4本柱を掲げ、法人・短大・中学校高等学校の3部門が一体となって、具体的な実施計画を策定し、展開していく。

変化の時代に 応える計画策定

近年、教育現場ではICT教育の導入や探究的な学びの推進など、学びの在り方そのものが大きく変わってきている。他方、令和7年9月に公表された令和6年度人口動態調査では、出生

数は70万人を下回り、予想を超えるスピードで少子化が進んでいることが明らかになった。教育機関の定員充足に向けた取組は、今後、ますます困難度を増していく。

さらに、改正私立学校法を受け、学校法人は今まで以上にガバナンス強化、運営の透明性及び厳格化、説明責任の明確化、情報公開等が制度として求められることとなった。

このため、本学院においては、進行中の第V期中期計画（令和4年～8年）の

数に70万人を下回り、予想を超えるスピードで少子化が進んでいることが明らかになった。教育機関の定員充足に向けた取組は、今後、ますます困難度を増していく。

論説



2025年、日本人科
学者の坂口志先生と北
川進先生がノーベル賞を
受賞しました。坂口先生
は免疫の仕組みを、北川
先生は新しい化学の可能
性を切り開いたことで、
世界から高く評価された
のです。

けれども、注目すべき
なのはその研究成果だけ
ではありません。受賞の
記者会見で、坂口先生は
「知識や成績よりも、探
究心や粘り強さを大切に
してほしい」と語りまし
た。北川先生も「失敗を
楽しめるかどうかを未来

も、若い頃から「なぜ？」
を切り開く鍵になる」と
話しています。
この言葉に込められて
いるのは、「非認知能力」
の大切さです。非認知能
力とは、テストの点数で
は測れない力のこと。最
後までやり抜く力、人と
協力する力、自分を信じ
る心、感情をコントロール
する力などが含まれま
す。すぐに結果に表れに
くいものですが、長い目
で見ると、人生や社会を
豊かにする確かな力で
す。

正解のない問いに立ち向かうための力とは

という小さな疑問を大切
にしながら、何度も失敗
を繰り返して、それでもあ
きらめずに前に進んでき
ました。そうした姿勢が、
やがて世界を変える発見
へとつながったのです。
けれども、そうした歩

みは特別な人にしかでき
ないものではなく、ありま
せん。誰にでも、「なぜ？」
という問いや、失敗から
学ぶ経験があります。だ
からこそ、皆さん一人一
人にも、未来を切り開く
力が備わっているのだ
です。

そして、その力の土台
となるのが、「非認知能
力」です。最後までやり
抜こうとする気持ちや、
失敗しても立ち直る粘り
強さ、友人と協力しなが
ら学ぶ姿勢、そして自分
を信じる心。こうした力

の一体感と推進力を確保す
る構成としている。
① 法人部門（持続可能な
基盤づくり）
法人部門では、改正私立
法に対応した理事会・監
事・評議員会の機能強化を
図り、ガバナンス体制の再
構築を進める。また、財務
の健全化、予算執行の透明
性向上、人材育成の体系化
など、経営基盤の強化と適
正な人事評価及び教職員の
働き方改革に取り組む。な
かでも、新たな人事評価制
度の構築、教職員の研修・
キャリア支援、ワークライ
フバランスの推進など、人
的資本への投資を重視す
る。

② 短期大学部門（学生確
保と教育の質向上）
短期大学部門では、入試
改革や広報戦略の強化によ
り、学生募集力を高めると
同時に、地域の高校との連
携や体験授業の拡充を通じ
て進学希望者との接点を広
げる。また、全学的教学マ
ネジメントの実施状況と整
合させた学修成果の可視
化・進捗管理、実践的な職
業教育の推進等により、地
域に貢献する人材の育成を
目指す。

③ 中高等学校部門（人間力
の向上）と体系的な教育
中高等学校部門では、「人間力
の向上」を重点的に掲げ、非
認知能力の可視化と成長感
のある指導体制を構築す
る。自己肯定感や協働性、課
題解決力などの育成に取
組むとともに、DXハイスク
ールとしての機能を強化し、
ICT教育や探究活動の充
実を図る。また、現在休校
中の中学校についても、今
後の再開に向け、高等学校

思いやりや共感といった
できないことは何でしよ
うか。それは、「なぜだ
ろう？」と問い続けるこ
と。すなわち、正解のな
い問いに立ち向かい、考
え続けること。そして他
人の気持ちに寄り添い、

皆さんが日々の中で感
じる疑問、思うようにい
かず悔しいときの気持ち
を、友人とのすれ違いに
悩む経験。そうしたすべ
てが、非認知能力を育て
る貴重な機会です。それ
は、やがて正解のない問
いに立ち向かう力へとつ
ながっていきます。

未来はまだ誰にも見え
ません。だからこそ、目
には見えない力が必要で
す。点数では測れない皆
さんの強さ、人を思いや
る気持ち、自分を信じて
前に進む力。それが、こ
れからの社会を支えてい

くのです。
進むスピードは人それ
ぞれ。回り道も、立ち止
まることもあるでしょ
う。でも大丈夫。比べな
くていい。焦らなくてい
い。「今、自分にできる
ことを精一杯やる」その
姿勢こそが、未来をつく
る力になります。

どうか忘れないでくだ
さい。皆さんの中には、
AIには決してまねでき
ない大切な力が確かにあ
ります。その力を信じ、
今日という一日を大切に
生きてください。

国際学院埼玉短期大学
常任理事・事務局長
小山有一朗

保と教育の質向上）
短期大学部門では、入試
改革や広報戦略の強化によ
り、学生募集力を高めると
同時に、地域の高校との連
携や体験授業の拡充を通じ
て進学希望者との接点を広
げる。また、全学的教学マ
ネジメントの実施状況と整
合させた学修成果の可視
化・進捗管理、実践的な職
業教育の推進等により、地
域に貢献する人材の育成を
目指す。

との接続を意識した体系的
な教育設計を検討してい
く。
素性を高めるKPIと
PDCサイクルの確立
第VI期中期計画では、各部門
が掲げる目標に対して具体
的なKPIを設定し、PDC
サイクルを通じた継続
的な改善と成果の「見える
化」を重視している。これ
により、計画が単なる理念
にとどまらず、実効性を伴
った教育改革として確実に
推進される。

日薬大と包括連携協定結ぶ

地域社会の活性化に寄与

中学校高等学校は、校地
が隣接する伊奈町に所在す
る日本薬科大学と令和7年
3月11日（火）に「包括連携協
定」を締結した。本協定は、
両校が密接に協力・連携す
ることにより、高大連携を
さらに推進し、双方の活力
ある個性豊かな教育活動の
展開と、地域社会の一層の
活性化に寄与することを目
的としている。

具体的には連携事業として
は、①高校および大学によ
る特別講義や出張授業の実
施、②生徒・学生・教職員
の相互交流、③ポランティ
ア活動・サークル活動・部
活動等の相互連携と情報提
供、④両校の施設や設備の

優先的な相互利用、⑤伊奈
町と連携した特色ある地域
交流事業の推進、さらに、
その他として、目的達成の
ために必要な事項が挙げら
れている。

これにより、高校生にと
っては大学の専門的な学び
や研究活動に触れる貴重な
機会が得られ、進路意識の
向上や学問への関心深化が
期待される。今年の夏季休
業中には連携事業として、
「高校生薬理学実習」に10
名の生徒が参加し、大学の
充実した設備の中で、高校
ではなかなか体験できない
学びの機会を得た。その後
も連携事業に積極的に生徒
は参加し、学びを深めてい
る。大学にとっても、地域
の教育機関との協働を通じ
て、社会貢献の実践や新た
な教育モデルの創出につな
がることを期待される。

本協定を新たな契機とし
て、日本薬科大学の協力を
得ながら、本校は地域と共
に歩み、次代を担う人材の
育成と持続可能な社会の実
現に一層貢献していく所存
である。



今後、各施策の進捗状
況を定期的に確認し、必要
に応じて柔軟に見直す運
用を行っていく。第VI期中
期計画は、変化の激しい時
代における本学院の「羅針盤
」として、持続可能な運営と
ブランド確立に向けた確かな
一歩としたい。

敦 照

生成AIの発
展が日々話題に
なる。瞬時に情
報を整理し、文
章や画像を生み
出す力は、驚異
的である。今ま
では一部の人が得られな
かった知識、技術を誰もが
享受する時代となったと
もいえる。▼教育の現場で
は、「探究的な学び」が重
視されている。正解を早く
出すよりも、問いを立て、
試行錯誤し、他者と議論を
重ねながら答えを見つける
過程こそが、真の学びを育
める。▼最近の研究では、生
成AIが認知能力に「二面
的な影響」を与えている。す
なわち、適切な使い方では認
知能力を高めるが、過度な
依存は思考力を弱めるとい
うことである。▼学生、生徒
が「なぜ」「どうして」を
自ら考え、仲間と対話を重
ねていく重要性は変わらない。
そこに生成AIという
新しい道具が加わったと考
えればいいのではないかと考
えたい。▼AIの力を
当り前のことであるが、
楽をして大きな成果を得る
ことができない。脳も筋肉
も「適度な負荷」が成長に
は欠かせない。AIの力を
恐れず、賢く使いこなし、
本校が目指す人材育成をし
ていきたい。



五感を使いタイ料理に挑戦

6月20日に小林サークルイン先生、関美奈子先生による「外国料理講習会」が行われました。テーマは熱帯地域に暮らすタイ王国で、異文化の食と背景にある文化について学びました。

タイ料理はうま味や塩味などの5つの基本味、そして辛味・甘味などが交錯して成り立っていて、とても複雑な味の構成であることが分かりました。また味覚だけではなく、視覚・嗅覚の五感を使い調理を通じてタイの文化を感じることができました。

日本では馴染みのない香料のナンプラーやコプミカン、バイトゥーイなどに触れることができ、貴重な体験をすることができました。

この講習会を通して、国によって使う材料や調味料の違いがありますが、料理の工程や自分が信じる「味」を大切にすることは世界共通であるということが分かりました。

ご指導いただいた先生方に感謝し、今回の講習会で学んだことを忘れず、今後

高校・食物調理コース「外国料理講習会」

自分の信じる「味」は世界共通

短大「はじめての災害食講座」開催

学習資源を地域住民へ提供



災害食講座で講師の話を熱心に聴く受講生

短大の公開講座は、昭和59年（1984年）に始まり、今年で42年目を迎えた。今年度は6講座を開講することとし、本学の学習資源を生かした質の高い学びを地域住民へ提供している。

10月18日に開催された「さいたま市委託事業 はじめての災害食講座」在宅避難生活乗り越えるために」は、防災クッキングアドバイザーの鈴木佳世子氏を講師に迎え、今年で7回目の開催。近年、防災への関心は特に高まり、応募数は定員を超えている。ビニール袋を使用した炊飯をはじめとする調理実習と、講師の被災体験に基づく普段からの災害への備えについて講義で学んだ。

今年度は学生ボランティアア2名が調理実習で受講者の補助を行った。健康栄養学科2年の鈴木里々愛さんは、「知識を深める良い機会だと思っ応募した。学び

防災への関心高く定員超え

ビニール袋で炊飯など体験



講師の鈴木佳世子氏



調理実習の様子

ながら人の役に立ちたいという気持ちもあり、活動を通じて自分自身も成長した

「Un Piatto」が、卒業記念品の「かまどベンチ」を使用した炊き出し実習を実施した。公開講座の講師や受講者にもけんちん汁の試食が勧められ、顧問や学生と交流する姿が見られた。

学食に図書を「出前・展示」

図書館利用のきっかけづくり

読書週間の取組みと学生図書委員会の活動

の学校生活に活かしていきたいです。

図書館は、10月27日、11月9日の読書週間に合わせ、学食での図書展示を行った。この展示は「学生に人気の高い学食に図書を出前し、もっと読書に親しんでらおう」という目的のもと、学食と図書館の共同企画で昨年度からスタートした。

好評につき、今年度は第2弾を実施することとなった。「1回の食事のやり取りで子どもの心はつぶれることはないという一文がとても印象に残りました」、「仕事をする楽しさを、絵



お気に入りの図書をお勧め



また、図書館を利用したことのない学生がどうしたことのない学生がどうした

令和6年度決算 総額約35億円

大宮キャンパス空調機更新 伊奈キャンパス屋外トイレ棟改修

財務情報

令和6年度の決算概況をお知らせします。資金収支計算書では決算総額は前年度と比較して、1億18百万円増の約35億円となりました。収入の部では、学生生徒等納付金収入は7億48百万円でした。支出の部では、大宮キャンパス屋上防水工事、空調機器更新、伊奈キャンパス屋外トイレ棟の改修、プロジェクト整備等の教育施設整備を行いました。また、事業活動収支計算書では、教育活動収支は10百万円の黒字、教育活動

外収支は8百万円の赤字となり、経常収支差額は2百万円の黒字となりました。貸借対照表では「資産の部合計」は1億15百万円、前年度末と比較して35百万円増加しました。「基本金」は1号基本金が2億65百万円増加、2号基本金が2億20百万円減少しました。以上の結果、「純資産」は、97億25百万円となり、前年度末と比較して26百万円増加しました。詳しくは、当学院のホームページをご覧ください。



なった」と話した。受講者からは、「知識はあってもなかなか体験できない。実際に調理できてよかった」「おいしくて驚いた」等の声が開かれた。

また、当日は調理クラブ「Un Piatto」が、卒業記念品の「かまどベンチ」を使用した炊き出し実習を実施した。公開講座の講師や受講者にもけんちん汁の試食が勧められ、顧問や学生と交流する姿が見られた。

読書週間の取組みと学生図書委員会の活動

ボードゲーム会の終了に伴い、ボードゲームの貸し出しも開始されている。先述したイベントに加え、図書館での学食メニューレシピ集2025の先行配布や、先輩から受け継がれる「学生図書委員会機関紙 Koala」の第21号（10月27日発行）など、活発に活動を行った。

学内でのイベントにとどまらず、埼玉県内最大級の図書館イベントである「図書館と県民のつどい埼玉2025」にも昨年度に引き続き参加する予定である。昨年度、「図書館と県民のつどい埼玉2024」でのSALA（埼玉県大学・短期大学図書館協議会）加盟館による所蔵資料展示会に初めて参加した際には、本学のブースにて委員長・副委員長が発案した企画「本当に役に立った！私たちの1冊」の紹介を行ったところ100名を超える来場者が立ち寄ってくださった。今年度も、たくさんの方々の来場者の方々と交流の機会を頂けることが、非常に楽しみである。

第40回記念幼児絵画展表彰式開催

ゼミ生が運営を担当、学びの場に

「では、係の方お願いしまあす。」「はあ、いい！」。表彰式前の所作指導で、子どもたちの緊張をほぐすための「チョットだけみんな楽しんで遊ばしよ」の場面。リハールでは、この時の係学生の返事は「はい！」だった。もともと楽し



表彰式後の記念撮影

「そうなる雰囲気になければ」ということで、係学生の返事が、「はあ、いい！」に変更し、表彰式を盛り上げるための工夫をした。表彰式の運営を担当したのは、教育学ゼミのメンバー17名。2年生は昨年も担当したが、式場の誘導や受付の仕事が中心で、式場内で式を運営する2年生の様子はまだ見ることができなかつた。しかも今回が第40回開催記念の大切な表彰式と言われて、ますます緊張感が高まったようだ。初めて経験する1年のゼミ生の緊張感はずいぶん高まっていた。今年の五峯祭のテーマは「Shiny Days」笑顔はじける五峯祭。教育学ゼミでは式の運営を通して、

表彰される子どもたち、そしてその保護者を最高の笑顔にすることを目標として取り組むことになった。それなのに、自分たちがこんなに緊張しているのは、そう思う気持ちがまた新たな緊張に繋がるといふ悪循環。それでも教育学ゼミの学生たちはそんな重圧に耐え、素敵な表彰式を展開してくれた。

式の途中、呼名されて泣き出す子がいた。普段とは違う環境の中ではそんな子もいるかもしれないと、事前の準備の中で話題にはなっていた。しかし、嫌がって母親にしがみつく現実の子どもの姿に接すると、司会の学生も誘導の学生も途中で暮れて立ちすくんでしま

まう。ところがそのとき、賞状の授与者である「つくし会」会長の中村治美審査委員は、賞状を持って壇上からその子のところに歩み寄り、優しくおめでとうの言葉がけをして泣きじゃくる子の母親にその賞状を渡した。「そうかこういう対応の仕方があるのか」。保育者を目指すゼミ生にとって、このときの中村会長

の行動は大切な学びとなった。胸に焼き付いたようだ。幼い子どもたちの誇らしさと恥ずかしさの表情に触れることができたこと、多くの保護者の前に立つ経験ができたこと、子どもたちや保護者の笑顔を引き出せたこと、いざというときの保育者の行動について大切なことを学べたこと。幼児絵画展の表彰式運営を通して、教育学ゼミのメンバーは多くの学びを得ることができたようだ。

私は、2年間同じ認定こども園で実習を経験しました。1年次は5日間の観察・参加実習を行い、2年次は15日間の責任実習を行いました。1年次は、初めての

実習で緊張や不安がありました。5日間という短い時間でしたが、子どもたちとの関係を深めることが出来ました。2年次は、1年次の実習で関わった子どもたちが数

名いるクラスで責任実習を行いました。私は、保育実習IIを前に、授業や保育実習Iでの学びを通して、全体を見ながら1人ひとりの様子に合わせた活動をを行うには、日々の保育を臨機応変に変え、個々に寄り添うことを両立していくことが重要だと考えました。そこで、保育実習IIでは、目の前の子どもに寄り添いながら関わることを大切にすると同時に、常に全体を見ることが心掛

り、「全体を見ることが心掛り」と子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について

第32回 味彩コンテスト

埼玉県産食材のおいしさに感動



調理審査風景

「味彩コンテスト」は、埼玉県芸術文化祭2025協賛事業でもあり、さらに農林水産省関東農政局、埼玉県、さいたま市等の11団体から後援と、パレスホテル大宮等の4団体から協賛を頂き、同窓会との共催で無事開催させていただきました。

本年度は、一般の部「彩の国黒豚・埼玉県産のたまご・埼玉県産野菜のいずれれかを使用した」ご飯にあう「彩り野菜料理」、高校の部「埼玉県産のたまご・埼玉県産野菜・国内産豚肉のいずれれかを使用した」高校生

のバランス弁当」をテーマにレシピを募集し、一般の部130名、高校の部147名から応募を頂きました。

レシビ審査を通過した一般の部、高校の部各20名の中から上位各6作品を選

出し、令和7年8月5日に調理・試食審査会を行いました。出場者は皆、満を持しての調理審査とあって、それぞれ創意工夫のある質の高い作品に仕上げられていました。本学が国連グローバルコンパクトに加盟していることからSDGsの視点に立ち、食品の廃棄に

ついても配慮して作り上げた作品は、どれも甲乙つけ難く、素晴らしい作品となっていました。

最優秀作品には、一般の部、桶川市の田口拓路さん「Tomates facies」彩り野菜のガーテン風、高校の部、国際学院高校の荻野蒼空さん「午後も元気に頑張るたんぱく質弁当」が選ばれました。

審査委員長の綾部園子先生からは、「普段の生活において、あまり意識せず

に埼玉の食材を食べておりました。今日のコンテストで改めて埼玉の食品のおいしさを感じました。今日皆さんがこのコンテストに際して、いろいろ工夫され、とても素晴らしい、おいしい作品を作ってください。今回の経験を生かして、さら

教育実習を終えて 信頼関係を築く大切さ

幼児保育学科2年B組 飯島 弥夕



私は、2年間同じ認定こども園で実習を経験しました。1年次は5日間の観察・参加実習を行い、2年次は15日間の責任実習を行いました。1年次は、初めての

実習で緊張や不安がありました。5日間という短い時間でしたが、子どもたちとの関係を深めることが出来ました。2年次は、1年次の実習で関わった子どもたちが数

名いるクラスで責任実習を行いました。私は、保育実習IIを前に、授業や保育実習Iでの学びを通して、全体を見ながら1人ひとりの様子に合わせた活動をを行うには、日々の保育を臨機応変に変え、個々に寄り添うことを両立

していくことが重要だと考えました。そこで、保育実習IIでは、目の前の子どもに寄り添いながら関わることを大切にすると同時に、常に全体を見ることが心掛

り、「全体を見ることが心掛り」と子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について

り、「全体を見ることが心掛り」と子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について

保育実習を終えて 主体性尊重できる保育者に

幼児保育学科2年A組 徂馬 彩月



私は、保育実習IIを前に、授業や保育実習Iでの学びを通して、全体を見ながら1人ひとりの様子に合わせた活動をを行うには、日々の保育を臨機応変に変え、個々に寄り添うことを両立

していくことが重要だと考えました。そこで、保育実習IIでは、目の前の子どもに寄り添いながら関わることを大切にすると同時に、常に全体を見ることが心掛

り、「全体を見ることが心掛り」と子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について

り、「全体を見ることが心掛り」と子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について子ども一人ひとりの様子について

教育実習（栄養教諭）を通して学んだこと 児童の目線に立った授業を

健康栄養学科 食物栄養専攻2年A組 柳瀬 虹歌



私は母校の小学校で教育実習に挑み、4年生の教室で多くの時間を過ごしました。研究授業では「野菜を知って、食べて、げんきな体をつくらう」をテーマに、児童が食への関心を高め、健康との関わりを考えられるよう工夫しました。授業

構想の過程では、児童の理解度や反応を踏まえて板書や発問の仕方を工夫し、児童の目線に立つて伝えることの大切さを学びました。

研究授業では、児童が自分の考えを積極的に発言したり、友達の意見に共感したりする姿が見られました。また、給食時間には食物アレルギーのある児童への対応の様子を学び、細やかな配慮や現場で工夫されていることを間近で学びました。安全な給食を提供するために、多くの方の協力と支援が必要であること

を実感し、栄養教諭としての責任と役割の大きさを改めて感じました。今回の経験をを通して、すべての児童が安心して食事できる環境づくりと食に関する指導ができるよう、学びを深めていきたいと思

います。

います。

校外実習を通して学んだこと 栄養士の責任と役割実感

健康栄養学科 食物栄養専攻2年B組 柳瀬 桃歌



私は、上尾市内の保育園で校外実習を経験させていただきました。実習では調理や食事補助を体験させていただき、限られた時間の中で効率よく動き、丁寧に作業をすることが大切だと感じました。特に切裁では、食材の大きさや形にばらつきが出る

と、見た目や食べやすさに関する指導ができるよう、学びを深めていきたいと思

います。

います。

校外実習を通して学んだこと プロの技術や心構え学ぶ

健康栄養学科 調理製菓専攻2年 田口 拓路



私は帝国ホテル東京で10日間の校外実習を経験させていただきました。実習では、盛り付けやソースを濾す作業、肉の焼き場での調理補助等を行いながら多様な食材や料理に触れ、幅広い業務を体験しました。特に最終日には、お客様の前でローストビーフをカットし提供するという貴重な機会もいただきました。

不慣れな私に対して、スタッフの皆様は作業手順を丁寧に指導してください、

ご・埼玉県産野菜のいずれれかを使用した」ご飯にあう「彩り野菜料理」、高校の部「埼玉県産のたまご・埼玉県産野菜・国内産豚肉のいずれれかを使用した」高校生

のバランス弁当」をテーマにレシピを募集し、一般の部130名、高校の部147名から応募を頂きました。

レシビ審査を通過した一般の部、高校の部各20名の中から上位各6作品を選

出し、令和7年8月5日に調理・試食審査会を行いました。出場者は皆、満を持しての調理審査とあって、それぞれ創意工夫のある質の高い作品に仕上げられて

いました。本学が国連グローバルコンパクトに加盟していることからSDGsの視点に立ち、食品の廃棄に

ついても配慮して作り上げた作品は、どれも甲乙つけ難く、素晴らしい作品となっていました。

最優秀作品には、一般の部、桶川市の田口拓路さん「Tomates facies」彩り野菜のガーテン風、高校の部、国際学院高校の荻野蒼空さん「午後も元気に

頑張るたんぱく質弁当」が選ばれました。

審査委員長の綾部園子先生からは、「普段の生活において、あまり意識せず

に埼玉の食材を食べておりました。今日のコンテストで改めて埼玉の食品のおいしさを感じました。今日皆さんがこのコンテストに際して、いろいろ工夫され、とても素晴らしい、おいしい作品を作ってください。今回の経験を生かして、さら

さら

令和7年度 第27期生国内研修

経験を「未来」へ

国内研修に見る生徒の成長

今年度の国内研修は、9月22日から24日にかけて関西方面で実施された。1日目は大阪を中心に活動し、2日目はユニバーサルスタジオジャパン(USJ)、3日目は神戸市街地での別研修という3日間の行程であった。今回の研修に向け、研修委員が募集され、「自主的・主体的に働くリーダー」として行動する」という目的のもと、研修委員たちは点呼や連絡の伝達、整列の指示などを通して全体を動かす力を磨き、本番ではその成果を発揮した。

この国内研修を通して、生徒たちは計画を立て、仲間と協力し、時間を意識して行動する力を培った。研



クラブ活動報告

逆境を力に、あきらめず挑戦

高校2年H組 山形美由紀

この夏、私は七種競技でインターハイに出場し、8位入賞という結果を残しました。結果だけを見ると華やかに見えるかもしれませんが、そこにたどり着くまでの道のりは決して順風満帆ではありませんでした。冬季練習の時期、私はけがをして思うように体を動かさなくなり、仲間が全力で練習している姿を見ながら、自分だけ取り残されていくような感覚に何度も悔しさを感じました。それでも、「今の自分のできることを全力でやる」と心に決めました。できないことを嘆くのではなく、少しずつ前に進むことだけを

意識しました。走れないなら筋力を鍛え、跳べないならフォームを研究する。そんな日々を積み重ねていくうちに、少しずつ体も心も前を向けるようになりました。春になり、本格的に練習が再開できるようなになると、「ここから絶対に取り返す」という強い気持ちで毎日練習を続けました。迎えた関東大会では、それまでの努力が実を結びました。すべての種目に全力で挑み、最後の瞬間まであきらめずに戦った結果、自己ベストを更新しての逆転優勝。表彰台の上で感じたあの達成感と喜びは、一生忘れられません。念願だった

でも次の種目は得意なやり投げ。「ここで絶対に流れを変えよう」と自分に言い聞かせ、集中しました。助走を始めた瞬間、これまでの努力を支えてくれた人たちの顔が思い浮かびました。全力で投げたやりの美しい弧を描き、45m52。自己ベストを3mも更新しました。その瞬間、涙がこみ上げてきました。結果は8位入賞。信じ続けた努力が、ついに形になった瞬間でした。

この経験を通して、私は「逆境こそ自分を強くする」ということを学びました。あの冬のけがも、苦しめた日々も、すべてが今の私をつくってくれたと思

います。これからも、どんな壁があってもあきらめず、挑戦し続ける選手でありたいです。

全国大会で初入賞

高校2年H組 山本 睦子

私は陸上競技で400mと400mハードルを専門としています。中学校から陸上を始め、少しずつ結果を残せるようになり、気づけば県大会、関東大会、そして全国の舞台に立てるようになり、自信のあつた400mハードルで自分の力を出し切ることができました。予選で敗退してしまいましたが、悔しい結果に終わりました。

その後、国民スポーツ大会では300mハードルに出場しましたが、そこでも思うような結果を残すことができませんでした。それでも、これらの経験を通過して多くの出会いやつながりが生まれ、あらためて自分

がたくさんの方々に支えられていて、感謝しています。同時に、全国トップレベルの選手たちと競い合うことで、自分との差を痛感し、さら



陸上競技部

さらに上を目指したいという気持ちが一層強くなりました。悔しさの中にも、レース展開の工夫や走りの安定など、確かな成長を感じることができました。仲間や先生やトレーナー、家族、そして日々切磋琢磨している仲間たちなど、多くの方々の支えがあったからこそ、結果だと強く感じています。

そのために、自分に足りない部分を一つひとつ磨き、これまで支えてくださった方々に結果で恩返しできるように努力を重ねていきます。

今回の海外研修で得た経験は私にとって大きな財産です。異文化にふれ時には仲間と協力し様々なことに挑戦した日々はこれからの学校生活に活かせるようにしたいです。

研修体験を生かしさらに成長

高校2年A組 相原 瑠海

私たちが第2学年は9月23日から2泊3日で大阪・神戸方面への国内研修に参加しました。今回の研修は自

由行動がメインとなり自分たちで計画を立てて行動することで学びと発見の多い充実した3日間となりました。1日目は大阪府内を巡り、たこ焼きなどの本場の味を堪能し道頓堀などの有名な観光地を訪れました。埼玉ではなかなか味わえない雰囲気にも触れたいと思



海外研修第1回

海外、汝を玉にす

高校2年H組 川名 咲穂

た。2日間の疲れが残る中、海のすぐ近くで朝から潮風を浴びても心地よく爽やかな気持ちで1日が始まり

した一人ひとりの協力そして支えてくださった先生方のおかげです。この経験を思い出します。

今後の学校生活にも生かして成長していきたいと思

今回の国内研修を通して研修委員長として貴重な経験をさせてもらったことに心から感謝しています。少ない人数の研修委員でしたが互いに声を掛け合い協力しながら準備や当日の運営を進めることができました。私自身前にも立つことが苦手でしたが仲間や先生方の支えもあり少しずつ自信を持つことができたように思いました。大きなトラブルもなく無事に研修を終えることができました。

私は今年、初めての海外研修に加えて研修委員長も務めさせていただきました。全員が安全に研修を終えられるよう、事前に委員と打ち合わせを重ねました。コミュニケーションも行ったことで、終始順調に事が運びました。

研修を通して感じたのは、「思いやり」と「チームワーク」の大切さです。委員を筆頭に各々がその場

でできることをしていました。その結果、点呼や移動がスムーズに行えました。特に印象的だったのは、急遽行なったバスツアーがスムーズに完了しました。委員全員がすぐに動き、大成功に終わりました。このような場面を通して、この学年の団結力を強く感じました。研修初日は、バスガイドさんの案内で市内を観光しました。翌26日は、班ごとに分かれ、夕方まで自由に市内を満喫しました。

26日夕方から28日まで、各ホストファミリーと過ごしました。私のホストファミリーには、年の近い子どもたちがいました。一緒に海へ行ったり、近所を散歩したり、買い物を行いました。私のつたない英語も、ホストファミリーは親身に聞いてくれました。「YES」「NO」とははっきり伝える文化にも触れ、自分の思いを率直に話せるようになりました。これも文化の違いから学んだ大切なことです。

慣れない環境だったからこ

異文化体験は貴重な財産に

高校2年D組 眞中 麗

私たちが海外研修第2回は9月25日から30日までオーストラリアでの海外研修を行いました。ほとんどの人が初めての海外で日本と全く違った環境での5日間

はとても濃い日々でした。1日目の飛行では予定より2時間遅く出発し予定時刻を過ぎて到着したのが研修の始まりでした。到着したその日にはバスでシドニー動物園に移動し園の方が民族の歴史について教えて頂いたり、蛇やトカゲを見せて頂いたりしました。その後自由に動物園を回り海外の動物の迫力に圧倒されました。

ホームステイでは海外の方との異文化交流を目標に最初は英語で話すのが難しくうまく伝わらないことが多くありました。伝わらないなかでもジェスチャーや翻訳機を使ってコミュニケーションをとりながら各家庭で海やショッピング朝のピクニックなどそれぞれ違った形の交流ができたと思います。現地の生活を体験することで日本とは違った非日常を味わうことができました。

3日目はクラス全員でオーストラリアやミセス・マツコリーズを観光しました。ガイドの方が説明しながら案内して下さり世界的に有名な建物を実際に見てそのスケールの大きさに圧倒されました。最終日のシドニー別行動では行ったことのない国を班で行動することには不安がありました。見慣れない道を地図やスマホを見ても道がわからなかったり英語で読めなかったり不便なことが多くありましたが班員全員で協力し1日楽しくシドニーを堪能できました。

今回は実行委員長として参加しました。決定した時から自分が務められるのか、仕事をこなせるのか心配だらけで小講堂での集まりから点呼を正確に行うことをいつも以上に心がけていました。

実際の研修ではみんなの協力もあり誰一人かけず時間厳守で研修旅行ができました。海外研修を無事に終えられたのは下田先生を中心とした先生方の協力や積極的なクラスを動かしてくれた実行委員のみんながいたからこそだと思います。

世界への助走 TGGで語学研修

英語は「コミュニケーションの道具」実感

高等学校第1学年主任 亀井 真也

10月22日、本校の生徒を引率し、「Tokyo Global Gateway (TGG)」で英語学習体験を実施しました。TGGは、英語のみを使わずに、学校の授業では得られない英語コミュニケーションを体験できる場として毎年1年生が利用している施設です。今回もさまざまなプログラムに参加し、生徒たちは英語で考え、伝え、協力することの難しさや楽しさを学びました。

施設内は空港やホテル、カフェ、クリニック、旅行代理店などを模したエリアで構成されており、それぞれの場面でネイティブのエンジニアと対話する機会が豊富です。先生がリアルな英語環境をつくり

出していました。最初は、緊張から言葉が出てこなかったり、相手の発音を聞き取れず戸惑ったりする生徒も多く見られました。しかし、エンジニアが笑顔で優しく、そして、生徒の気持ちを高めるように会話をリードしてくれることで、次第に表情がほぐれ、少しずつ自分の言葉で英語を使うようになる姿が見られました。

特に印象的だったのは、カフェでの注文体験です。生徒たちは英語メニューを見ながら自分の好みを選び、発音に苦戦しながらも一生懸命に伝えていました。「May I have」と声をかけ、注文が通った瞬間の安堵と喜びの表情は忘れられません。中には「自分の英語でも通じた！」と笑顔で振り返る生徒もあり、その小さな成功体験が自信につながっていることが伝わってきました。

また、グループで挑戦する活動全体を通して、「もっと話せるようになりたい」と伝えるようになれば完璧じゃなくても伝わるんだと分かったという声も聞かれました。英語に対する苦手意識が軽減された様子や、この経験をきっかけに学習意欲が高まり、海外研修も楽しみながら挑戦できる資質を育てていきたいと思えます。

活動全体を通して、「もっと話せるようになりたい」と伝えるようになれば完璧じゃなくても伝わるんだと分かったという声も聞かれました。英語に対する苦手意識が軽減された様子や、この経験をきっかけに学習意欲が高まり、海外研修も楽しみながら挑戦できる資質を育てていきたいと思えます。

また、グループで挑戦する活動全体を通して、「もっと話せるようになりたい」と伝えるようになれば完璧じゃなくても伝わるんだと分かったという声も聞かれました。英語に対する苦手意識が軽減された様子や、この経験をきっかけに学習意欲が高まり、海外研修も楽しみながら挑戦できる資質を育てていきたいと思えます。

また、グループで挑戦する活動全体を通して、「もっと話せるようになりたい」と伝えるようになれば完璧じゃなくても伝わるんだと分かったという声も聞かれました。英語に対する苦手意識が軽減された様子や、この経験をきっかけに学習意欲が高まり、海外研修も楽しみながら挑戦できる資質を育てていきたいと思えます。

また、グループで挑戦する活動全体を通して、「もっと話せるようになりたい」と伝えるようになれば完璧じゃなくても伝わるんだと分かったという声も聞かれました。英語に対する苦手意識が軽減された様子や、この経験をきっかけに学習意欲が高まり、海外研修も楽しみながら挑戦できる資質を育てていきたいと思えます。



リアルな英語環境で学ぶ

クラブ活動報告

目標はオリンピック出場

3年K組(一貫部) 山岸 直人

私たち射撃部は、7月28日から31日まで広島県で行われた全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会に出場しました。厳しい予選を勝ち抜き、過去最高人数の18名が出し、さらに創設以来初となるエアライフル男子団体戦で優勝を果たす事が出来ました。

私は中学生から射撃部に所属し、多くの先輩方の笑顔を見てきました。中学の頃の私は迷惑をかけてばかりで、不安や悩みを抱えながら生活していました。このままでも貢献できるのか、全国優勝なんてできるのか、そもそも部活動を続けられるのかと自分に問いかけました。その葛藤があったからこそ、変わる決意を固めることができ、高校

では自分が部長になり絶対に優勝するという目標を定めることができました。全国大会で優勝を果たした時、初めに心に浮かんだのは喜び以上に返返しすることができたという気持ちでした。優勝できたのは単に射撃技術だけでなく、人としても成長できたからです。休みの日も指導してくれたコーチ、顧問の先生、様々なことで支えてくれた家族、そしていつも応援してくれる学校の先生方、部活の仲間、クラスメイト、支えてきてくれた全

ての人のお陰で全国制覇を果たすことができました。このような素晴らしい環境に感謝してもしきれません。次の私の目標は、この思いを次世代に繋げる事です。既に私は部長を引退し、後輩にバトンを渡しました。これからも全国制覇という伝統を繋げられるよう部員をサポートしていきたいと考えています。また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

また、大学でも射撃を続けて、将来の目標であるオリンピック出場を果たすために頑張りたいです。

第2学年海外研修

英語での挑戦、異文化への理解、そして主体性の成長

高等学校第2学年主任 中川沙矢香

令和7年9月24日から29日にかけて第1団、25日から30日にかけて第2団の海外研修が実施されました。昨年度は国内での研修が中心であったが、今年度は原則全員参加の海外研修という、これまでの体制に戻す形での実施となった。期間は6日間であったが、そのうち2泊は機内での移動となり、現地オーストラリアで過ごすのは実質3泊4日であった。研修の主な内容は、シドニー市内観光、別荘研修、ホームステイ、そしてシドニー動物園の見学であった。

本行事は、研修委員として参加した生徒たちが中心となって運営する「生徒主体」のプログラムとして位置づけられた。委員は指示や点呼を担当し、他の生徒たちはそれに耳を傾け、行動に移す。まさに「生徒が生徒を動かす」学びの姿が随所に見られた。

本学年の研修は、①積極的に英語でコミュニケーション

本学年の研修は、①積極的に英語でコミュニケーション

本学年の研修は、①積極的に英語でコミュニケーション

本学年の研修は、①積極的に英語でコミュニケーション



第1学年大学訪問

大学への期待高まる

1年H組 宮澤 爽空

私は、聖学院大学と芝浦工業大学を訪問しました。実際に大学を訪問し、学生の様子やキャンパスに触れることで、高校では感じられない新しい発見がたくさんありました。

まず、最初に訪問したのは聖学院大学です。聖学院大学では、学生が中心となり、キャンパスツアーをしてくださり、とても親しみやすい雰囲気でした。ツアー中は、カフェテリアなど、理系分野に力を入れている大学であり、理系に興味がある私には非常に惹かれるものがありました。

特に、機械工学や情報工学、電気電子工学など、現代社会を支える技術を幅広く学べる研究分野があり、それぞれの分野で最先端の研究が行われていることを知り、学習カリキュラムも実践的で、座学だけではなく、実験やプロジェクト型学習を通して、社会で役立つスキルが身に付けられる点が印象的でした。



訪問した生徒は環境への関心を高め、自然との共生を意識しているようになることを目指しています。学びと成長の場として心に残る貴重な経験となりました。

2日目はUSJで過ごしました。仲間と共に行動し、アトラクションを楽しみながら絆を深めました。待機時間や食事を共にすることで、普段話したことのない友達とも自然と交流が生まれ、仲間とのつながりが強まりました。USJでの体験を通じて、新しいことへの挑戦を楽しみ、自分の個性や強みを再確認することができました。

通信制課程校外学習

琵琶湖でカヤック体験

自然の大切さ、保護の重要性学ぶ 高等学校通信制課程主幹 大野譲太郎

通信制課程では、毎年度の宿泊を伴う学習研修を行っています。今年度の研修は、9月8日から10日の2泊3日の日程で、琵琶湖、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)、清水寺を巡る内容でした。初日は東京駅へ集合し、新幹線で京都駅へ向かい、

バスで日本最大の湖、琵琶湖へと移動しました。琵琶湖では、BSCウオータースポーツセンターのご指導の下、SDGsの重要性を学び、カヤック体験を行いました。最初は思うように進まず戸惑う生徒たちも、指導を受けて、次第に漕ぎ

方が上達していききました。後半は2人1組のカヤックに乗り換え、声を掛け合いながら協力し、チームワークの重要性を実感しました。美しい湖の景色を眺めながら、自然との触れ合いを通じて、自分の視野が広がったと感じました。

この体験を通して、自然の大切さとその保護の重要性についても学びました。

この3日間の研修では、連日猛暑日が続く、普段積極的な外で行動しない生徒が多いなか体調等の不安がありました。生徒は移動や宿泊施設も含め、この行程すべてを仲間と絆を深めながら、意欲的に行動ができていました。また、普段の学びとは異なる貴重な体験を通じて、社会性や自己効力感を高めることができました。これは今後の学校生活を送るうえで貴重な体験となりました。



両学科2学年合同で 昨年同様盛り上がる

短大体育大会

学生生活での良い思い出に 先生、委員の協力を得て大成功

短大実行委員長 淵上 遥花



今年の体育大会は先生方をはじめ、総括学生のおかげで無事開催することができました。また、両学科2学年合同で昨年と同様盛り上がりがある楽しいイベントとなりました。

私は委員長を務めるにあたり、周りの状況を常に把握して前もって行動することを心がけました。昨年とは、競技内容や1日の流れが大きく変わりました。そのため、委員会を開いた際、競技ごとの説明や流れを体

験することができました。そして、当日のリハーサルと本番では委員長、副委員長が中心となり競技を進めることができました。リハーサルで分からないところは、担当の先生と話し合い、解決してから本番に臨むことが出来ました。

今年度は「生徒主体の体育祭」を目指し、実行委員を立ち上げて準備を進めてきました。実行委員は、競技内容の検討や運営ノウハウの工夫、当日の進行の確認など、多くの役割を担いながら全

体を支えた。その姿は、まさに生徒が中心となって行事をつくり上げる取り組みを体現していた。準備の過程では、意見を出し合い、時に悩みながらも協力して形にしていく中で、委員の一人ひとりが大きく成長する機会ともなった。こうした努力の積み重ね

が本番の円滑な運営に繋がっており、参加する生徒全員が安心して競技や応援に力を注ぐことができたのである。

当日は、勝敗を超えて最後まで仲間を応援しあう温かい雰囲気にも包まれていた。特にクラス対抗リレーでは、走者に向けた大きな声援が響き渡り、会場全体が一体となって盛り上がった。また、3年生が下級生をリードし、競技や応援だけでなく準備の面でも模範を示したことはたいへん印象的であった。その背中を見て1、2年生も協力しながら取り組むことができ、

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

特別な一日になりますように

短大五峯祭

短大五峯祭委員長 永田さくら

今年度の五峯祭では、仲間とともに準備を進める中で、多くの学びと成長を得ることができました。最初は不安や戸惑いもありましたが、支えてくれる仲間や先生方のおかげで、一つひとつの課題を乗り越えることができたと感じています。

準備期間のモニタリング作成では、構想どおりの形にすることが難しく、思うように進まない時期もありました。しかし、仲間と試行錯誤を重ねる中で少しずつ完成へと近づいていく過程は、とても貴重な時間でした。また、事前巡回で参加団体の教室を見て回った際には、今年度の五峯祭全体の雰囲気鮮明に伝わり、

「今年度はこんな素敵な五峯祭になるんだ」と実感した瞬間、ワクワクした気持ちが一気に高まりました。五峯祭当日は、多くの来場者の皆さまに足を運んでいただき、学生一人ひとりの思いや努力が形となった姿を見ていただくことができました。学生と来場者の皆さまとの関わりの中で見

られたキラキラした笑顔は、とても温かく、私自身も幸せな気持ちでいっぱいになりました。準備期間を通して得た経験や仲間とのつながりは、これからの挑戦に踏み出す際に、きっと大きな支えとなり、自信へとつながっていくと感じています。

最後に、この五峯祭を支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

「少数意見の尊重」です。部活動などのかねあい、クラスでの企画は難しいが何らかの形で企画に携わりたいという意見を尊重し、新しい実行委員会を立ち上げその生徒たちの要求に応えることができました。

さらに、五峯祭の準備を中心に行う実行委員のそばで仕事の様子を見ていて、五峯祭の計画・準備とおして彼らが成長する、その姿こそが五峯祭の醍醐味であることを改めて気づくことができました。社会で求められる問題解決能力とは何か、その定義は難しいですが、その一つが調整力だと感じた瞬間でした。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。



今年のテーマは「Shiny Days」笑顔はじける五峯祭

今年度の五峯祭では、仲間とともに準備を進める中で、多くの学びと成長を得ることができました。最初は不安や戸惑いもありましたが、支えてくれる仲間や先生方のおかげで、一つひとつの課題を乗り越えることができたと感じています。

準備期間のモニタリング作成では、構想どおりの形にすることが難しく、思うように進まない時期もありました。しかし、仲間と試行錯誤を重ねる中で少しずつ完成へと近づいていく過程は、とても貴重な時間でした。また、事前巡回で参加団体の教室を見て回った際には、今年度の五峯祭全体の雰囲気鮮明に伝わり、

「今年度はこんな素敵な五峯祭になるんだ」と実感した瞬間、ワクワクした気持ちが一気に高まりました。五峯祭当日は、多くの来場者の皆さまに足を運んでいただき、学生一人ひとりの思いや努力が形となった姿を見ていただくことができました。学生と来場者の皆さまとの関わりの中で見

られたキラキラした笑顔は、とても温かく、私自身も幸せな気持ちでいっぱいになりました。準備期間を通して得た経験や仲間とのつながりは、これからの挑戦に踏み出す際に、きっと大きな支えとなり、自信へとつながっていくと感じています。

最後に、この五峯祭を支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

「少数意見の尊重」です。部活動などのかねあい、クラスでの企画は難しいが何らかの形で企画に携わりたいという意見を尊重し、新しい実行委員会を立ち上げその生徒たちの要求に応えることができました。

さらに、五峯祭の準備を中心に行う実行委員のそばで仕事の様子を見ていて、五峯祭の計画・準備とおして彼らが成長する、その姿こそが五峯祭の醍醐味であることを改めて気づくことができました。社会で求められる問題解決能力とは何か、その定義は難しいですが、その一つが調整力だと感じた瞬間でした。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。



短大五峯祭

今年度は「生徒主体の体育祭」を目指し、実行委員を立ち上げて準備を進めてきました。実行委員は、競技内容の検討や運営ノウハウの工夫、当日の進行の確認など、多くの役割を担いながら全

体を支えた。その姿は、まさに生徒が中心となって行事をつくり上げる取り組みを体現していた。準備の過程では、意見を出し合い、時に悩みながらも協力して形にしていく中で、委員の一人ひとりが大きく成長する機会ともなった。こうした努力の積み重ね

が本番の円滑な運営に繋がっており、参加する生徒全員が安心して競技や応援に力を注ぐことができたのである。

当日は、勝敗を超えて最後まで仲間を応援しあう温かい雰囲気にも包まれていた。特にクラス対抗リレーでは、走者に向けた大きな声援が響き渡り、会場全体が一体となって盛り上がった。また、3年生が下級生をリードし、競技や応援だけでなく準備の面でも模範を示したことはたいへん印象的であった。その背中を見て1、2年生も協力しながら取り組むことができ、

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

計画・準備をとおして成長 少数意見を尊重した運営

中高五峯祭

9月13日(土)、14日(日)に第28回五峯祭が開催されました。2日間で2000名以上の来場者を迎え、昨年度を上回る盛況を得ることができました。「土曜の涙を日曜の笑顔に」をテーマに設定し、2日間で違った様相を見せることで、2日連続で来場しても満足させることをコンセプトにしまし

たが、その取り組みが成果として現れたのではないかと思います。さて、本校の五峯祭では毎年「日頃の学習成果の発表の場」であることを意識してありますが、各部活動の発表や企画団体の展示などはまさにそれにふさわしいものであったと自負しています。

さらに、五峯祭の準備を中心に行う実行委員のそばで仕事の様子を見ていて、五峯祭の計画・準備とおして彼らが成長する、その姿こそが五峯祭の醍醐味であることを改めて気づくことができました。社会で求められる問題解決能力とは何か、その定義は難しいですが、その一つが調整力だと感じた瞬間でした。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。



特大アーチを設置

「少数意見の尊重」です。部活動などのかねあい、クラスでの企画は難しいが何らかの形で企画に携わりたいという意見を尊重し、新しい実行委員会を立ち上げその生徒たちの要求に応えることができました。

さらに、五峯祭の準備を中心に行う実行委員のそばで仕事の様子を見ていて、五峯祭の計画・準備とおして彼らが成長する、その姿こそが五峯祭の醍醐味であることを改めて気づくことができました。社会で求められる問題解決能力とは何か、その定義は難しいですが、その一つが調整力だと感じた瞬間でした。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の五峯祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

青空のもと選手宣誓



短大海外研修

異国の文化に触れる貴重な経験

仙台、横浜、豪州の3コース

令和7年度の海外研修は、仙台、横浜、オーストラリアの3コースに分かれて実施された。仙台コースは「新しい時代を生かすために必要な教養や人格形成の基盤となる能力の修得」「日本文化や歴史を学ぶ(名所旧跡を訪れ、感性を磨く)」「震災学習・地域振興の取り組みについて、視察研修を行う自然災害の脅威、命の大切さや家族との繋がりを再認識する」「コミュニケーション力や協調性、豊かな心を育む」を研修の目的に掲げ、5月28日から5月30日の2泊3日の日程だった。七夕ミュージアム、山寺、防災講話などが行われた。

横浜コースは日帰り、横浜公園、日本新聞博物館、学年間の繋がりが一層深まった。体育祭を通して、仲間の存在の大きさや協力しあうことの喜びを再確認することができた。練習から本番までのすべての過程はかけがえのない思い出となり、今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

今年度の体育祭は生徒全員の力が結集し、実行委員の尽力によって成功を収めることができた。今後の学校生活の大きな糧となるだろう。

西洋料理テーブルマナー講座

相手を思いやる気持ちや 食事を楽しむ心を育む

9月4日パレスホテル大宮にて「西洋料理テーブルマナー講座」が行われた。テーブルマナー講座は科目「日本文化と国際理解」で基本的な礼儀や作法を身につけるために、毎年大宮駅

西口のパレスホテル大宮にて「西洋料理テーブルマナー講座」が行われた。今年度のメニューは厳選黒毛和牛ローストビーフのサラダ仕立てエディブルフラワーと共に、旬の北海道えびす南瓜のクリームスー

広い会場で本格的なスタイルで行われる講座は、社会人として必要な礼儀作法だけでなく、相手を思いやる気持ちや食事を楽しむ心を育むことを目指している。

おもちゃインストラクター養成講座開催

日本古来、世界の木製おもちゃの遊び方学ぶ

4つのワークショップ・4つのレクチャー・全6時間の体験型カリキュラム

質の高い保育者養成に寄与

学生の自覚や技能の向上に役立つ

9月3日、第13回「おもちゃインストラクター養成講座」が開催され、国際学院埼玉短期大学の会場へ幼児保育学科の学生43名が集った。

この講座は、認定NPO法人「芸術と遊び創造協会」で、東京都新宿区にある東京おもちゃ美術館と提携して開講される例年人気の講座である。玩具を中心として展開される子どもの遊びと数々の学びによって、幼児保育学科の学生たちが保育者を目指す意識や自覚を高め、質の高い保育者養成に寄与することが期待される。

当日は同協会から講師が来場し、珍しい玩具の数々を教室に展示した。学生たちは、講座が始まる前から興味津々に玩具を手に取り、遊び方を模索していた。

この講座で実演される身近な素材を用いた遊びとは、例えば、画用紙・ハサミ・のり、という基本素材と道具を用いてできる「手品カード」や「六角返し」、「数字パズル」、「奇妙な生き物不思議ボール」と呼ばれるもので、日本古来より伝わる遊びのアイデアが詰まっている。また、カッターの持ち方や切り方について具体的な指導を受け、切りやすい方法や効率のよい道具の使い方も学んだ。学生たちは「手には2万個のセンサーがついている」といった講師の言葉に驚き、手指を自ら動かして素材に触れたりモノを作ったりすることの重要性を再確認していた。

また、新聞紙1枚でどのような遊びができるか受講者全員で考え、「新聞紙でとことん遊ぶ」という実践も行われた。ここでは、折る、ちぎる、破る、丸める、などの動作から「新聞紙かくれんぼ」や「新聞紙ボール」、「新聞紙ずもろ」、「新聞紙輪投げ」、「新聞紙じゃんけん」など多様な遊びが提案された。

新聞紙輪投げに紙皿を接着することで、「フリスビー」や「皿回し」に変化した。受講生たちは「うまくできない」「どうしたら成功するのか」と各自苦戦しながら皿回しに挑戦し、新しい方法を見つかったり教えあったりするなど工夫する力を発揮していた。

さらに、「世界のおもちゃで遊ぶ・学ぶ」では、世界グッドトイに選ばれている木製おもちゃの紹介や優れている内容、遊び方について一つずつ丁寧に教えて頂き、「忍者12人」、「ステッキ」、「かえるさんジャンプ」、「けん玉人形」、「さ

修了後に「認定証」授与

達成感に笑顔の学生たち

講座終了後には「おもちゃインストラクター認定証」が授与されたが、学生たちは達成感に満ちた笑顔で、完成した作品を自慢げに見せ合う姿があった。受講生からは、「楽しかった！家庭や保育の現場で用いられる素材が、これほど多様な遊びを生み出すとは思わなかった」「グループでの競争には思わず熱が入ってしまった、大人も十分に楽しめることがわかった」という声が寄せられた。

また、「子どもを引き付けたり夢中にさせるような遊びに対する考え方や方法を学んだ」「実習では自分なりの工夫を加えて身近な素材で遊んでみたい」など、保育者としての自覚や技能の向上に繋げようとする姿も見られた。

この講座ではゲームの優勝者に東京おもちゃ美術館の入場券が授与されるなど、受講者が玩具について引き続き関心を継続するよう工夫が為されている。

アカデミック・アドバイザーズ (AAD) 始動

アカデミックアドバイザーズ (ACADEMIC ADVISING) がスタート！

アカデミックアドバイザーズ (AAD) とは？
皆さんが学問的・個人的な目的を見つけ、それを達成することをサポートする「AAD」を始めました。「AAD」は、教職員との面談を通して、皆さんが以下の事項を達成できるように支援します。

＜相談例＞
・履修計画の策定 (学位・資格取得計画)
・大学の規定理解 (卒業要件等)
・卒業進捗 (成績や進捗状況の確認)
・リソースの理解 (学習資源・カンセリング)
・キャリア開発 (将来の目標と学業の関連)
・大学生活に適合するには？
・主体的な意思決定を行えるようになるには？

・アカデミックアドバイザーズの詳細は次の頁へ。
・困ったこと、相談したいことがあれば是非お尋ねください。相談内容は是非厳密に守ります。
予約方法:
1F事務室受付/アカデミックアドバイザーズに申し込んでください。

学生の皆さんが学業やキャリアの目標を達成できる

短期大学では後期からアカデミック・アドバイザーズ (AAD) が開始された。AADは学問的・個人的な目的を見つけ、それを達成することをサポートする。

組で、4月に設立されたデューベロップメンタル・エデュケーションセンター (DEC) とのシナジーが期待される。

アカデミック・アドバイザーズは、必ず役立てられると思えます。この活動を通して、思いやりの気持ちや助け合いの大切さを学ぶことができました。

この半年間、生徒会活動を支えてくださったこと、心より感謝申し上げます。日々の活動や学校行事の企画・運営など、どれも生徒会役員だけでは成し遂げられないことばかりでしたが、仲間や先生方、そして全校生徒の皆さんの支えがあったからこそ、私たちは前向きに取り組む、乗り越えることができました。この半年間の経験や学びを大きな糧としてこれからもさまざまなことにチャレンジしていききたいと思います。改めてこの半年間、ありがとうございました。

短期大学学生会活動報告

思いを引き継ぐ



前年度の会長の思いを引き継ぎ、学生会に携わる多くのメンバーと情報交換を繰り返しながら活動を行いました。

今年度は体育大会での「じゃんけん列車」や7月下旬に「夏祭り」を行いました。前年度より企画数は少なくなってしまいました。が、前年度から学生会に携わっている新2年生、そして今年度から携わる新1年生と共に、協力し助け合いながら活動を進めています。体育大会で行った「じゃんけん列車」では、学年、学科を越えた交流を促すことができました。勝ち負けにこだわらずに1人ひとりが企画を楽しんでいる様子が見られ、やりがいのある企画となりました。

7月下旬に行った「夏祭り」では、健康栄養学科のメンバーが行う「スタンプラリー」や、幼児保育学科のメンバーが行う「定期考査に向けた意気込みボード」と、学科ごとに行うものを振り分け、各学科で取り組みました。企画前からの準備や話し合いを行い、先生方の支えもあって企画を完成することができました。

そして11月の五峯祭に向けて、学生会も企画を運営していきます。前年度の反省を活かし、今年度は「写真映えスポット」を用意しています。前年度のような来客の方々と触れ合うような機会は少なくなりますが、来客の方々はもちろん、学生の皆さんが楽しめるような企画が作れるように努めていきたいと思っています。

企画運営を行っていく上で、私は報告・連絡・相談をすることの大切さを改めて実感することができました。委員会を通して関わっている場を設けて企画についてまとめていくことで、企画の質をより向上することができると感じています。私自身も会長として人前に立つて話すという機会を多くいただいたため、人前に立つということに慣れていくことができそうです。

これからも学生会を通して様々な企画を重ね、学生全体が「学生生活が楽しかった」と思えるように取り組んでいきたいと思っています。会長としてメンバーを支え、自身も他のメンバ

一人ひとりの力が大きな成果に

高等・中学校・生徒会活動報告



「学生会に入ると良かった」と思えるようにこれからも努めていきたいと思

令和7年度前期生徒会長の森心結です。皆さん、2025年をどのように過ごしていますか。勉強や部活動に全力投球できていますか。何か夢中になっていることはありますか。

今期の生徒会では新たな試みとして、生徒会公式Instagramのアカウントを開設しました。このアカウントは、生徒の皆さんの学校生活や部活動などの活躍をより多くの人に知ってもらうための情報発信の場としてスタートしました。夏休み中は本校の最大のイベントである五峯祭への準備に一生懸命取り組んでいる実行委員の様子などを投稿しました。9月からは五峯祭までのカウント

ダウン投稿も行いました。SNSという身近なツールを活用することで、五峯祭に対する周囲の関心と期待が日に日に高まっていくのを感じることができました。

そして迎えた五峯祭当日、保護者や地域の方々、卒業生などたくさんの方々が来場者で賑わいました。今年の文化祭は「土曜の涙を日曜の笑顔に」というテーマのもと、全校生徒が参加しました。そうした経験は、成功をおさめることができたと。また、バラエティー番組「新しいカギ」に出演した時に獲得した賞金を利用して、学校の入口に大型バスが通過できるほど大きなパルーンアーチを設置するこ

とことができました。とても見ごたえがあり、五峯祭を盛り上げてくれたと思います。

各クラスや部活動の企画・発表には、それぞれの個性と創意工夫が光り、来場者の方々から多くの好評をいただきました。限られた時間の中での準備作業は、苦戦したり、仲間同士で互いに衝突することもありました。話し合いを重ね、支え合いながら進めてきました。そうした経験は、参加した生徒一人ひとりとって何より大きな財産となったはずだと思います。

生徒会企画であった「一期一会」では、景品のお菓子を大量に買い足しても足りなくなってしまうほどたくさんの方に参加していただきました。ご協力いただいた募金

は、必ず役立てられると思えます。この活動を通して、思いやりの気持ちや助け合いの大切さを学ぶことができました。

この半年間、生徒会活動を支えてくださったこと、心より感謝申し上げます。日々の活動や学校行事の企画・運営など、どれも生徒会役員だけでは成し遂げられないことばかりでしたが、仲間や先生方、そして全校生徒の皆さんの支えがあったからこそ、私たちは前向きに取り組む、乗り越えることができました。この半年間の経験や学びを大きな糧としてこれからもさまざまなことにチャレンジしていききたいと思います。改めてこの半年間、ありがとうございました。

